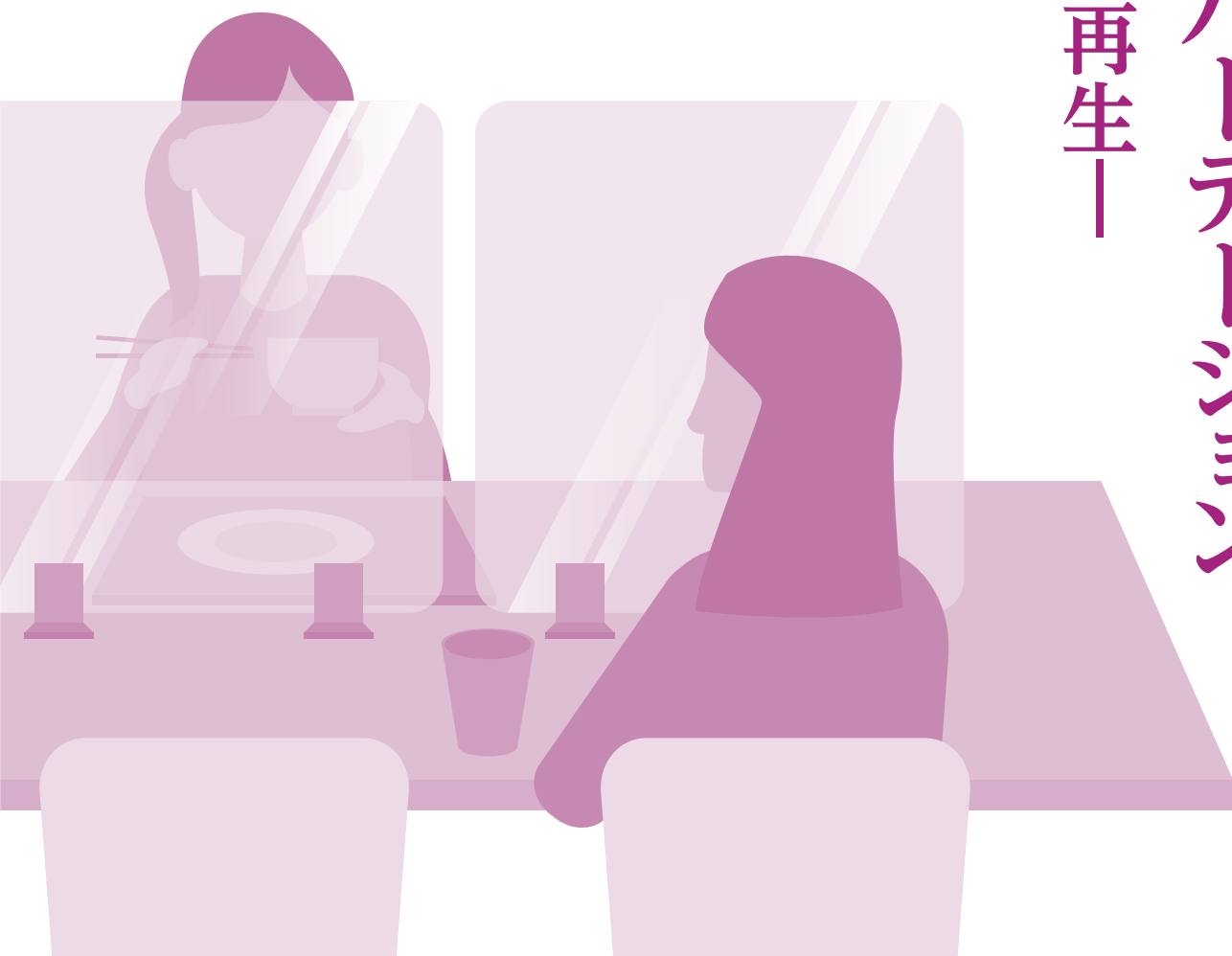


不要になったアクリルパーティション —学びの付加価値を付けた再生—

コロナ禍において、各大学は感染拡大を防ぐため、またオンライン授業実施に向けてITツールなどを積極的に導入するとともに、Zoomなどのオンライン会議システムを活用して授業を提供する体制を構築し、各所にアクリル板を設置するなど学習環境の整備を進めた。また、学内においても、感染症対策に最大限留意しながら教育活動を行い、学生や教職員はマスクの着用や手指の消毒、ソーシャルディスタンスの確保に留意するといった新しい生活様式が浸透した。

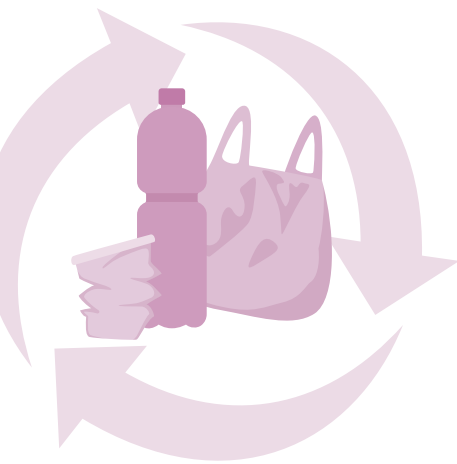
しかし、2023年5月8日に新型コロナウイルスが5類感染症に移行したことを受けて、大学の光景は再び変化することとなった。対策が緩和され、コロナ禍前と同様に教室での対面授業が主流となり、各所に設置され



ていたアクリル板なども撤去され、学内の雰囲気は以前のような活気あるものへと戻りつつある。同時に、コロナ禍の経験から得た利点や技術も生かしながら、場所や時間の制約を超えた柔軟な学びの機会も提供し、より質の高い教育環境を構築する取り組みも進んでいる。

環境省は不要になったアクリル板などの感染対策の備品について、プラスチック使用製品廃棄物などの排出抑制や再資源化実施を呼びかけている。その一方で、アクリル板などが不要となり対応に苦慮するなど、新たな社会課題となっている。

今号では、アクリル板をはじめとした新型コロナウイルス対策の備品について、不要となった際に「廃棄」ではなく、リサイクル・アップサイクル、レガシーとして再活用されている事例を取り上げ、大学においてどのような取り組みがなされ、活用されているのかを共有する機会としたい。



CONTENTS

産学連携による飛沫防止パネル再資源化

— 関西学院大学における飛沫防止パネル
リサイクルプロジェクト —

村上 芳秀 学校法人関西学院総務部総務課

循環型社会における新たな学びの創出

田中 純平 神奈川大学社会連携部
社会連携課長補佐

SAVE A LIFE!

アクリルアニマルプロジェクト

伊藤 敬生 九州産業大学芸術学部
ソーシャルデザイン学科教授

アクリル板のリユース

— 卒業生へのサプライズプレゼント —

高岡 淳 学校法人関西大学常任理事・法人本部長

産学連携による

飛沫防止パネル再資源化

— 関西学院大学における飛沫防止パネル
リサイクルプロジェクト —

村上芳秀

学校法人関西学院総務部総務課

1 はじめに

関西学院大学は、1889年に伝道者の育成とキリスト教主義に基づく青少年教育をめざして創立された大学である。兵庫県西宮市に上ヶ原キャンパスと聖和キャンパス、また、兵庫県三田市^{さんだ}に理系学部を中心とする神戸三田キャンパスがあり、合わせて現在14学部が設置されている。

新型コロナウイルスの蔓延により、関西学院大学においてもさまざまな感染予防対策を実施することになり、そ

の1つとして事務室の窓口や食堂などに飛沫防止パネルを設置していた。そして2023年5月8日に新型コロナウイルスが、感染症法上の5類に移行したことに伴い、これまで大学として実施していた感染予防対策を終了することになった。

各建物の出入り口を中心に設置していた手指消毒用のアルコールや、PC教室に配備していたキーボードやマウスなどを除菌するウェットティッシュなどは、在庫が無くなり次第撤収することを大学として決定した。ただし、飛沫防止パネルについては、さまざまな形状・素材でできた膨大な数量のパネルが各キャンパスに設置されていたため、これをどのように処分するかが課題であった。

また、飛沫防止パネルの取扱いについては、環境省からも、可能な限り排出の抑制や再資源化に努めるよう周知されており、教育機関だけではなくさまざまな組織・団体・企業等においても同様の課題となっていた。

このような状況の中、本学では飛沫防止パネルを単に廃棄してしまうのではなく、大学と企業が協働することで再資源化（リサイクル）の方向性を見いだすことが可能となったため、その取り組みを紹介させていただく。

2 活動のきっかけと組織体制

感染症法上の5類に移行する旨の発表がなされたことを受けて、学長を本部長とする関西学院大学SDGs推進本部（以下、推進本部）の下で、撤去可能となった飛沫防止パネルのリサイクルの可否とその方法を検討することになった。検討の中で、推進本部の下に発足した学生団体「KGS DGSキャンパスポーター」（以下、キャンパスポーター）と連携することで、単に回収した飛沫防止パネルを廃棄するのではなく、環境負荷の低減と、啓発を目的とした学生教育への還元を同時に実現できないかという意見が出された。そこで、産業廃棄物を所管する総務部と、キャンパスポーターの窓口である総合企画部、情報を発信する広報室において「飛沫防止パネルリサイクルプロジェクト」を結成し、実現に向けて動き出すことになった。

まずはじめに、大学から出る廃棄物の収集運搬を業務委託している株式会社大栄衛生（以下、大栄衛生）に、飛沫防止パネルのリサイクルの可否について相談を行った。その結果、素材ごとに分別されていることが条件となるが

リサイクルすることは可能である、との回答が得られた。一般的に「飛沫防止パネル」と言っても、実はその素材は4種類（アクリル樹脂、ポリカーボネート、PET樹脂、塩化ビニール）が存在し、素材ごとにリサイクルの方法が異なるため、各キャンパスに設置されているパネルをリサイクルするためには、回収したパネルを事前に分別する作業が必要であることが分かった。また、分別に際しては、4種類の素材を目視で判別することは困難であるため、判別するための専用機器が必要であることも判明した。さらに、パネルに貼られたシールやテープ類の除去がリサイクルの条件として示された。これらの課題をどのようにして解決すればよいか、さらに相談・検討を続けた。

話を進めていく中で、廃棄物を取り扱う大栄衛生としても、近々に各事業所から廃棄依頼があるであろう飛沫防止パネルを、環境保護の観点からどのように取り扱っていくかを模索中であることが分かった。また、同社としても大学生と関わり、SDGsの取り組みを一緒に盛り上げていきたい、という意向が確認できた。そこで、本学としても飛沫防止パネルのリサイクルを実現させたいと

いうこと、さらにキャンパスサポーターの活動方針とも一致することから、飛沫防止パネルリサイクルプロジェクトの一員として、協働して飛沫防止パネルのリサイクル方法を協議した。結果、大栄衛生側で飛沫防止パネルの分別に必要な専用機器を準備し、本学の学生が、回収した飛沫防止パネルの分別作業やシール類の除去作業を行うこととなった。

さらに、実施内容について打合せを進めていく中で、本学のOBである同社副社長 赤澤知宣氏からの申し出で、リサイクル業界の現状や課題、SDGsに関する情報について、廃棄物の収集運搬企業であるからこそ提供できる内容を凝縮した「環境授業」が実現した。

3 プロジェクト実施の様子

2023年6月28日（水）、プロジェクト決行の日を迎えた。当日はキャンパスサポーターを中心に約10数名の学生が参加した。まず、学内の講義室にて、大栄衛生 赤澤氏による環境授業からスタートした。授業の中では、「なぜリサイクルは環境によいと言われるのか」「具

体的にどのようなプロセスを経て次の製品になるのか」など社会全体でリサイクルを推進していくうえでの課題などについて、分かりやすく解説いただいた。

授業終了後は、学生側から「日頃ゴミを廃棄する時の注意点」や「リサイクル可能なモノ、不可能なモノ」についての質疑があり、有意義な意見交換を行うことができた【写真1】。

環境授業終了の後、屋外に移動し、あらかじめ各キャンパスから回収しておいた山積みの飛沫防止パネルの分別作業を学生が中心となって行った。作業の前に改めてこのリサイクルプロジェクトの意義について赤澤氏より説明があった後、プロジェクト参加学生たちが協力して、約2.1tの飛沫防止パネルを専用の機器を用いて、素材ごとに分別作業を行った。学生からは「分別や



【写真1】環境授業の風景

リサイクルの意義を知ることができた」「資源を有効活用する大切さを学ぶことができた」などの声があり、SDGsやリサイクルについての理解を深めてもらうよい機会になったのではないだろうか【写真2】。



【写真2】飛沫防止パネルの分別作業時の風景

4 課題と今後の展望

今回のリサイクルプロジェクトの主な成果としては、次の3点である。

- (1)学内から集めた飛沫防止パネル約2.1tを分別しリサイクルすることで、約5.9tのCO₂削減効果※1があり、環境負荷の低減に取り組むことができた。
- (2)学生にリサイクルやSDGsに関する新たな気付きや学びの機会を提供することができた。
- (3)産学連携によりSDGsの推進に寄与することができた。

大栄衛生をはじめ、学内外の多くの関係者が一丸となり、協力することでプロジェクトが実現できた。今後、同様のプロジェクトを実施する際は、今回の取り組みを生かし産学連携により学生も巻き込みながら対応していきたいと考えている。

政府としても、プラスチック製品の循環の取り組みを推進するための措置を盛り込んだ「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」を2022年4月1日に施行するなど、プラスチックごみの削減について本格的な取り組みを強化している※2。そのため、今回のような大規模なプロジェクトではなくとも、普段の大学運営の中で食品ロスの削減、廃棄物回収の細分化などにより、SDGsの目標にある「つくる責任、つかう責任」を学内で推進できる環境を整備し、持続可能な社会の実現に向けて、今後も取り組みを続けていきたい。

〈注〉

※1 国立環境研究所 温室効果ガスインベントリオフィス

※2 環境省 <https://plastic-circulation.env.go.jp/>

循環型社会における 新たな学びの創出

田中 純平

神奈川大学 社会連携部
社会連携課長補佐

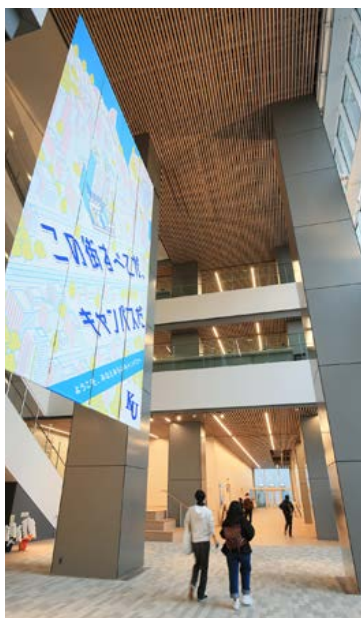
1 神奈川大学の「今」

神奈川大学は、1928年に創立し「質実剛健」「積極進取」「中正堅実」を建学の精神とする学生規模約1万8500人の私立総合大学である。2028年の創立100周年とその先の未来に向け、今、本学は大きな変革の中にある。2020年度の国際日本学部新設、2021年度のみなどみらいキャンパス開設、2022年度の建築学部新設に続き、2023年度には理学部を湘南ひらつかキャンパスから横浜キャンパスに移転し、理学部と工学部をリニューアルするとともに、化学生命学部、情

報学部を新設した。

みなどみらいキャンパスには、グローバル系3学部、約5000人の学生が通っている。低層階には「ソーシャルコモンズ」として、一般の人も利用可能なカフェやレストラン、社会人の学び直し需要にも対応したエクステンションセンターを用意し、開設以来、多くの賑わいを創出している。

このキャンパスの学びの特徴は、「街ごとキャンパス」にある。キャンパス近隣には、官公庁をはじめ、グローバル企業が集積し、美術館などの文化的施設も数多く存在している。そのような環境を活かし、地域全体をキャンパスととらえ、周辺企業や施設などとの連携によるPBの実施などにも積極的に取り組んでいる。そのきっかけを創発する役割を担うのが、私が所属する社会連携課が事務局を担う「社会連携センター」である。ソーシャルコモンズ内にオフィスを配置し、ステークホルダーとの総合窓口として相互の連携を強化し、環境、経済、社会的課題に資する取り組みを行っている。



[写真2]ソーシャルコモンズ



[写真1]みなとみらいキャンパス

2 デジタル工作機器を配備した「ファブラボみなとみらい」

ソーシャルコモンズ内では、3Dプリンターやレーザー加工機などデジタル工作機器を多数配備する「ファブラボみなとみらい」を運営し、学生のみならず地域に開放している。日本の大学で初めて学内にファブラボとして開設した本学湘南ひらつかキャンパス内の「ファブラボ平塚」が前身であり、みなとみらいキャンパス開設を機にその機能を移転し「ファブラボみなとみらい」として運営を開始した。開設当初は新型コロナウイルス感染症状況を踏まえ、学内での利用に留めていたが、2022年1月より一般開放をスタートし、近隣に勤める社会人、クリエイターなどさまざまな背景を持った人が訪れ、2024年2月末時点で学外会員数は538名、年間延べ約3000名を超える利用がある。

このファブラボみなとみらいでは、サーキュラーエコノミーをキーワードとした取組みも盛んに行っている。2021年度に経営学部道用ゼミとCircular Yokohamaが連携した「サーキュラーデザインプロジェクト」では、

学生が身近な廃棄物を別のものに転用するアイデアを創出、ファブラボみなとみらいを活用してプロトタイプまで制作し、サーキュラーエコノミーに積極的な企業担当者に向けて発表した。また、2022年度においては、コインの代わりにペットボトルキャップを入れて地域の循環型グッズを手に入れることができる「循環ガチャ」を横浜市内事業者と連携して制作し、地域や資源の循環を楽しく体験できるメディアとして、地域に向けたサーキュラーエコノミー実践の機会を創出した。



[写真3]ファブラボみなとみらい

3 ファブラボみなとみらいにおける アクリルパーテーション活用への検討

このような背景がある中で、2023年5月、新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移行した。徐々に通常の生活が戻り、それまで飲食店など各所に設置されていた飛沫防止のためのアクリルパーテーションの取扱いが新たな社会課題となりつつあった。本学のキャンパスにおいても大量に設置されていたアクリルパーテーションは一部を残し撤去し、倉庫に保管することとなったが、長い期間保管場所を確保しておくわけにもいかず、産業廃棄物としての廃棄も検討を余儀なくされる状態であった。このような事態を受け、ファブラボみなとみらいを運営する社会連携センターとしても、この課題をクリアできる方策を検討することとなった。

ファブラボみなとみらいは、本学の学部・大学院の学生であれば無料でデジタル工作機器を利用することができ、友人のプレゼントを制作する学生もいれば、地域で行うイベントのための制作物を作る学生の姿も見られる。(学外に向けては有料で開放しているが、次世代人材育

成の観点から高校生以下は無料、市内大学生は基本料金を無料としている。3Dプリンターについては、備え付けの材料のみ使用できる形としているが、レーザー加工機やCNCルーターなど他の機器を使用する場合は、加工する材料を自身で調達し、持参することになる。製品として完成されたものよりもプロトタイプを制作することを目的とすることが多いため、MDF板やベニヤ板など比較的安価に調達できる素材を使用するものの、一定のコストがかかることが利用者においては障壁になっている。

そこで不要となったアクリルパーテーションをファブラボみなどみらい利用者が材料として自由に活用できるようにすれば、利用者のデジタルファブ리케이션へのアクセスの障壁を取り除く一つの手立てとなると考えた。ただそれだけではなく、社会に向けての気づき、学びを提供することを視野に入れた取組みとすべく、以下3点の施策を実施することとした。

(1)ファブラボみなどみらい利用者による材料としての活用
アクリルパーテーションを材料として利用者が自由に

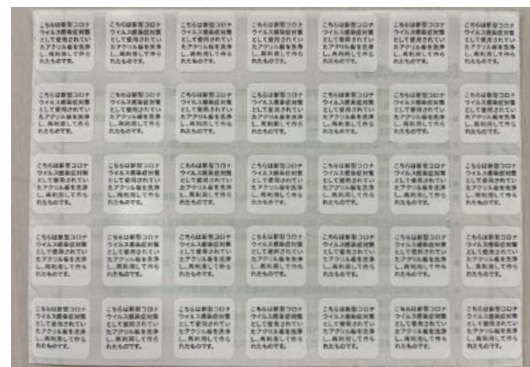
活用できるよう、レーザー加工機で加工できるサイズ(300mm×600mm)にカットしたものを中性洗剤で洗浄した上で配置した。また、第三者に提供することを目的として制作する場合は、作品には「こちらは新型コロナウイルス感染症対策として使用されていたアクリル板を洗浄し、再利用して作られたものです」というメッセージが入った専用シールを作品に貼付する運用とした。運用期間については、使用される量を想定することが難しかったことに加え、倉庫からの重量物の移動やカット、



[写真4]カットしたアクリル板



[写真5] アクリル設置の様子



[写真6] 作品貼付専用シール

洗浄の手間が発生することから、2023年5月〜9月末の限定運用として開始した。(一定のニーズがあることを確認したため、2024年2月末時点においても同運用を継続している。)

(2) Reアクリルデザインアワードの開催

この運用を機に、神奈川県大学生を対象にアクリルパーテーションを再利用した作品を募集しグランプリを決定するイベントを開催することとした。2023年5月23日〜6月9日を募集期間とし、集まった作品をファブラボみ



[写真8] グランプリ作品



[写真7] 作品募集チラシ

などみらいに展示、訪れた人による投票でグランプリを決定し、WEB上で公表した。コロナ禍における自身の想いや世の中に伝えたいメッセージを含めた作品、パーテーションとして活用していた際についたキズを活かすなどデザイン性のある作品、アクリル染料を活用した色鮮やかな作品、熱を加えてキズが目立たないよう模様を加える、素材を曲げるなど細かい技術が光る作品など、計16作品が集まった。作品を見た来訪者からは「デジタル工作機器を使えば身近な素材でこんなに素



[写真10] 作品展示の様子



[写真9] その他応募作品の例



[写真11] ワークショップ実施の様子

敵なアイテムを自分の力でも作れるということに驚いた」「不要になったものを簡単に捨ててはいけないという気持ちが変わって芽生えた」「アイデアをしっかりとカタチにすることで次なるイノベーションのきっかけが生まれると感じた」などさまざまな反応があった。

(3) デジタルファブリケーションとの接点を創出する

ワークショップの実施

本学学生のみならず、地域にもサーキュラーエコノミーを実践できる機会を創出することを目的に、本学学生有志によるワークショップも実施した。前述したアクリル

板を材料として、紙に手書きで書いた文字やイラストをレーザー加工機で刻印し、メッセージボードを制作するという内容とした。モノづくりが好きでデジタル工作機器に元々興味があった社会人、SDGsに関心がありコロナ禍で使用していたアクリルパーテーションを別の形に変化させるというストーリーに興味をもった小学生など、属性、動機はさまざま。同ワークショップを通じて「モノづくり」「サーキュラーエコノミー」「感染症」など、幅広い角度から、新たな気づきをもたらすことができたと同時に、学生の主体的なアクションを誘発するきっかけとなった。

4 学内、地域の資源を「学び」に

これらの取組みにおいて意識した点は、不要になったものを活用するという目的に留まらず、それらを「学び」に変換することだ。またその「学び」は学生のみならず、地域にも影響を与え、知の拠点としての役割に繋がる取組みとすべきと考えたことが3つの施策の併催に繋がった。また、本学単体での取組みではその内容に限

界があるため、関連する企業、自治体にアドバイスを求めることや、メディアなどと連携することにより、質の高いものに磨き上げることができた。この情報に接した人が具体的なアクションに踏み出せるようなインパクトを作ることを目標に置き、取組みの紹介において訴求力のあるデザインやストーリーづくりを意識したことも特筆すべきポイントだと感じている。

これらの取組みが終了した後、次の展開が自然発生したことに触れておきたい。前述のアワードやワークショップに積極的に関与した経営学部道用ゼミが、2023年度、不要になったものに新たな目的を設定することを目指した「repurposeプロジェクト」を実施した。学内で懸垂幕として使用していたターポリン素材を使用し、学生のアイデアによりがま口の財布など生活に身近なものへと転換させた。ターポリンは耐久性があるため屋外媒体として活用されることが多いが、印刷する内容からその役割を終えた後は廃棄されることが多い。本学においても学術、スポーツ、文化的活動などで優秀な成績を収めた内容を広報するためにキャンパスの建物に一定期間掲げていた懸垂幕の一部が廃棄予定として倉庫に

格納されていたため、同プロジェクトに供給した。

2050年カーボンニュートラル・脱炭素社会の実現に向け、サーキュラーエコノミーへの移行に寄与することを視野に入れ、学生に向けては個人レベルの循環の取組みを例に気づきをもたらし、ビジネスレベルにおける循環のデザインを意識できるようにきっかけを創出できればと考えている。

2024年度においても、ステークホルダーと連携し、新たなキーワードによるサーキュラーエコノミー実践のプロジェクトを計画している。サーキュラーエコノミーに限らず、学内の資源や神奈川の資源で学生が学び、その姿を見て社会が気づきを得る、こうした地域の知の循環を創出できるような取組みにしていきたい。「いつもこの街には神奈川大学生がいる」そんな声が聞こえるような、地域に染み入る、地域に根差した大学になることを目指して。

SAVE A LIFE! アクリルアニマルプロジェクト

伊藤 敬生

九州産業大学芸術学部
ソーシャルデザイン学科教授

1 人間の命を守ったアクリル板で 動物たちの命を救うプロジェクト

九州産業大学芸術学部ソーシャルデザイン学科伊藤敬生研究室では、コロナ禍で使用された「飛沫防止アクリルパーティション」の廃棄問題と、絶滅危惧種の加速度的増加という2つの社会課題にソーシャルデザインの視点でアプローチする「アクリルアニマルプロジェクトACRYLIC animal project (以下Aap)」に取り組んでいる。

新型コロナウイルス感染症対策として使用されたアクリル製パーティションは、大型の産業廃棄物として処理が必

要になり、かつ、アクリル樹脂はリサイクルのスキームが確立されておらず、大半が焼却や埋立て処分される現状にある。同時に近年、世界中で野生動物が絶滅の危機に瀕しており、その数は1年間に4万種以上と言われている。コロナ禍で、人間の命を守り続けながら不要となった飛沫防止対策用アクリルパーティションを、次は動物たちの命を守るためにアップサイクルできないかとの思いから生まれたのが本プロジェクトだ。

2 愛しい動物たちがアクリルのように 透明になって消えてしまわぬように

プロジェクト第一弾では、大学内の教室で使用した廃棄予定のアクリルパーティションを使い、学生がデザイン・制作した絶滅危惧種の動物型チャームをカプセルトイで販売する「ガチャリテイ*1」を実施することに。企業やアーティストも趣旨に賛同し、型抜製造業者「株式会社モリサキ」(福岡県久留米市)はアクリル板の加工を担当、福岡県在住のデザイナーで本学芸術学部卒業生でもある「ZOOZ」の平野友夏理氏らもAapに参加することとなった。

プロジェクトに取り組む学生5名は絶滅危惧種について調査し、それぞれ3種類の動物型チャームをデザイン。平野氏らプロのデザイナーから指導を受けながら、デザインをブラッシュアップした。さらに、カプセルに封入する説明書には、その種の生息地やレッドリスト^{※2}のカテゴリなど基本情報に加え、特性などを記載し、手に取った人がその動物に興味を持ち「絶滅危惧種の加速的増加」という社会課題に目を向けるきっかけとなるよう工夫した。

2023年6月24日(土)～30日(金)、福岡市内の商業施設でチャリティイベントを実施。直前のメディア報道の影響もあり、準備していた200個は2日で完売。追加制作し、1週間で422個が売れるなど大きな反響があった。集まった金額7万6600円は全額「日本動物園水族館協会」に寄付。野生動物保護のために活用される。

3 取り組みが自走する社会の実現にむけて 全国の動物園・水族館との連携

実は、私たちの身近なところにも絶滅危惧種が存在している。福岡市動物園で飼育されている「ツシマヤマネコ」

はその1例。同園では10月8日に制定されている「ツシマヤマネコの日」に合わせ「ヤマネコ祭」を開催している。昨年Aapでは、学内に設置されていたアクリルパーティーションを使い、平野氏が直径約1メートルのツシマヤマネコのパネルを制作。学生と子どもたちが一緒に海洋プラスチックや色粘土を使い、パネルに色付けするワークショップを行い、絶滅危惧種に対する啓発活動を実施した。現在は、支援の対象によって活動内容を変えて展開している。

Aapは活動を通じて、人々が2つの社会課題に気づき、一人ひとりが自分ごととして捉える機会になることを目的に、今後は全国の動物園や水族館へ支援の輪を広げていく。



[写真]アクリルアニマルプロジェクト

〈注〉

※1 伊藤教授が2011年から行っているガチャガチャ(カプセルトイ)を使ったチャリティ活動

※2 国際自然保護連合(IUCN)が作成する絶滅のおそれのある野生生物のリスト

アクリル板のリユース

―卒業生へのサプライズプレゼント―

高岡 淳

学校法人関西大学常任理事・
法人本部長

1 アクリル板の設置と撤去

まず、新型コロナウイルス感染症への関西大学の対応、その感染予防対策として実施したアクリル板の設置について振り返ってみたい。

本学では、従前から感染症を含む危機事象を想定した危機管理体制を構築しており、今回の新型コロナウイルス感染症に関しても2020年1月に対策本部会議を立ち上げ、早々に事態の分析と対策・施策の策定に着手した。対策本部会議では、政府などから出される感染防止措置を受けて、協議のうえ学舎などの出入口における消毒液や非接触型体温計の設置、教室への消毒セット配置、教

員へのフェイスシールドの配布、そして教室や食堂などにおけるアクリル板の設置などの感染予防対策を施した。アクリル板については、飛沫感染防止対策として2020年5月から教室、食堂、コモンズを中心に順次設置を開始し、最終的には全キャンパス合計で約7000枚を設置するに至った。

そして、アクリル板の設置から3年が経過した2023年5月には、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが2類から5類へ移行することを受けて、対策本部会議においてアクリル板をはじめ消毒液などの感染予防の備品を撤去することとなった。

撤去したアクリル板は、再び感染が拡



アクリル板を設置した授業

大した場合に備えて各部署で保管することになったため、各部署とも保管場所の確保に苦慮するとともに将来不要となった場合のリユースを含めた適切な処分方法が課題となっていた。

2 コロナ禍での学生生活

今春の卒業生の大半は、2020年4月入学生、すなわちコロナ禍のために入学式が挙行できなかった世代である。恐らくコロナ禍で最も被害を被った世代ではないだろうか。

入学した直後に1回目の緊急事態宣言が大阪府下に発令され、入学式は中止、オリエンテーションは、履修ガイダンスや学生証の交付など、必要最小限のものに限定された。春学期の授業はリモートが中心となり、クラブ・サークルの勧誘イベントはすべて中止、入部の機会さえなかった。また、キャンパス内は立ち入り禁止の措置が取られたため、学生間の交流や友達作りなども制限され、本来1年生の間に体験できる様々な機会が失われることとなった。

2021年度になるとワクチン接種が進んだこともあり、対面授業が増え、課外活動も徐々に行われるようになってきた。長期間「ステイホーム」を強いられた学生達は、最初のうちは、思うように友達作りができず、また課外活動団体へ入部する機会がない状態が続いたが、徐々にではあるが本来のキャンパスライフを取り戻していった。このような状況は就職活動にも少なからず影響を与えた。クラブ活動やアルバイトなど実体験が極端に少なかったことから、就職活動における、「いわゆる「ガクチカ」(「学生時代に最も力を入れたこと」の通称)を表現することもできなかった。当該学生達は2年生になる頃から就職活動に対する不安がつのり、就職活動の本番でも常に不安が付きまとったのではないだろうか。

この世代の学生達のほとんどは、入学前に思い描いていたのとは全く異なる不安、孤独、忍耐、犠牲ばかりの学生生活に始終することとなってしまっただろう。2023年5月によく新型コロナウイルス感染症が感染法上の5類移行という出口が見える頃には4年生になっていた。そして、その学生生活には常に、人と人とを隔てる「アクリル板」があった。

3

3 アクリル板リユースの検討

5類移行後、学内から撤去されることになった大量のアクリル板が、各キャンパスの倉庫に保管されたが、これらの処分や再利用をどうするのか、全学の会議においても議論があり、SDGs推進や環境保全を担当する高橋智幸副学長に委ねられることとなった。

本学は、2008年に「関西大学環境保全プロジェクト」を設置以降、2009年に「関西大学環境憲章」及び「関西大学環境方針」を発表するとともに、2015年には常設の「学校法人関西大学環境保全委員会」を設置し、学園全体の環境保全について様々な取り組みを進めている。

また、2018年には学長のもとにSDGs推進プロジェクトを設置し、教育、研究、大学運営に加えて、学是「学の実化」のもと、産学官連携によってSDGs達成に貢献すべく、「関西大学SDGsパートナー制度」を設け、地方自治体、企業、他大学、NPOなど70を超える団体と連携している。

これら環境保全やSDGsの分野を教学組織内で取り

纏めていたのが高橋副学長であった。その高橋副学長から環境保全委員会の事務局を担当している小職にアクリル板リユースについての相談があった。

当初は、本学出資の事業会社「株式会社関大パンセ」に依頼し、アクリル板を加工したキーホルダーやクリアケースなどを商品として販売してもらうことを想定していた。しかし、議論を重ねるうちに、コロナ禍に屈せず強く逞しく大学を駆け抜けた卒業生全員にアクリル板を加工した記念品（フォトスタンド）を贈呈することの方が意義深く、喜んでもらえるのではないかとこのことで意見の一致をみた。

この決定を受けて、本学からアクリル板の再利用について知恵や技術を有する企業を募ったところ、ある業者から、フォトスタンドへの再加工が実現可能とのアイデアが示された。コロナ禍の混乱の中で各部署が調達したアクリル板の数は必ずしも正確に計数されておらず、果たして卒業生6500名分を加工することができるのか、全学からトラックで回収したアクリル板の山を前にしても、なお不安であった。そしてさらなる課題は、卒業生全員に配るための加工費をどう工面するかであった。

4 加工費の工面

経費捻出の問題に頭を悩ませていたところ、在学生の父母・保護者によって組織されている教育後援会が支援に名乗りをあげてくれた。同会は、大学の教育方針に則って、日頃から物心両面に渡りきめ細かな援助をしていた。日頃から本学にとって極めて心強い支援団体である。

同会は、「100円朝食・100円夕食」への支援、年末帰省できない学生やアルバイトができない学生に向けた「食」の支援の他、コロナ禍における友達作り支援サイト「触れずにフレンズ」の開設やワクチンの大学拠点接種を実施した際、接種した学生に対して大学前商店街で利用できる500円クーポン券を配付していただくなど、日頃から大いに協力をいただいていた。

今回も、とある会合において同会会長と同席することがあり、アクリル板リユースのお話をしたところ、副学長と小職の思いを汲んでいただくとともに経費捻出についても理解をいただいた。

その後、同会では会長のもと、各所への調整を済ませ、今回の卒業記念品に係る費用について無事捻出した

だく運びとなった。そしてこの計画が実現に向け大きく動き出すこととなった。

同会の温かいお気持ちは学生や我々教職員の励みにもなり、この場を借りて厚く御礼申し上げる次第である。

5 プレスリリース

大学としては、卒業生へのサプライズプレゼントの意味合いもあり、3月19日に予定されている卒業式まで公開しないという選択肢もあった。しかし、アクリル板の再活用は大学だけでなく社会全体の課題となっていることから、速やかにその取り組みを広く公表することが大業としての責務であると判断し、1月26日の学長主催のメディア懇談会で紹介するとともに、1月30日にプレスリリースを配信した。

プレスリリースには学長のメッセージや、趣旨に賛同し、協力いただいた教育後援会長のメッセージ、そして本学のSDGsの取り組みなどを掲載した。その上で、卒業生への思いとして、アクリル板を擬人化し、「卒業生のみなさんへ みなさんとは、キャンパスの中で授業や

ランチの時に一緒に過ごさせてもらいました。…」と記載したアクリル板からのメッセージカードを添えた。このメッセージは卒業式当日に初めて全文を公開して記念品に添えることにした。

配信後は、SDGsや入学時、コロナ禍の影響を多大に受けた2020年度入学の卒業生に対する取り組みなどといった観点から複数のメディアから問い合わせがあり、ウェブニュースに取り上げられた他、新聞紙面でも大きく掲載された。

6 卒業生へのサプライズプレゼント

フォトスタンドの納品があったのは、卒業式の2週間前だった。納品後、早速小職の手にサンプルが届けられた。透明の袋から取り出してみると市販のものとは違い、フォトスタンドの表面には細かな傷が入っていた。「この傷は今春卒業する学生達がコロナ禍で過ごしたあの苦しかった時間を刻んでいる」そう思えて、綺麗なもののより格別な味があった。卒業生はこのサプライズプレゼントをもらってどう思うだろうか、卒業式の日が楽しみに

なってきた。

いよいよ卒業式の日を迎えた。入学時は、マスクで表情さえ見えなかったが、この日はみんな笑顔だった。友人と談笑している人もたくさんいる。入学後キャンパスライフが思うようにいかず、苦労を重ねてきたこの世代だから、その学生達を送り出す日は、我々教職員には何か特別な思いがあった。

卒業式で学長は式辞の中で「コロナ禍の中でも、みなさんは勉学を続け、卒業という大きな成果を上げられました。みなさんの努力を称えます。そして、みなさんの協力に感謝します。ここにおられる全てのみなさんを誇らしく思います」というメッセージを送った。

卒業生総代からの答辞では、「コロナ禍でなかなか自分が思い描いていた大学生活を送れなかった人も多いかと思えます。コロナでなければと考えてしまうこともあったかもしれません。しかし、このような状況だからこそ生じた感情や考えがあり、その感情に基づいて行動したこと、出会えた人がいて、得られたものがあったと思います」、「これまで当たり前だと感じていた日常生活が、様々な人々との繋がりや連鎖によって生み出されるかけ

がえのないものであるということを再認識することができた」など、コロナ禍で過ごした学生生活をむしろポジティブに捉えている言葉に我々教職員は感銘を受けた。アクリル板をリユースしたフォトスタンドは卒業式終了後、各学部の学舎で卒業証書とともに配布された。

配布されたフォトスタンドには、卒業生と苦難の時を共に過ごした、関西大学アクリル板一同からのメッセージカードが収まっていた。メッセージ全文は次のとおりである。

みなさんとは、キャンパスの中で授業やランチの時に一緒に過ごさせてもらいました。でもみなさんは、マスクをしていることが多く、なかなか顔を覚えられずいました。



配布したフォトスタンド

やっとマスクを外したかなと思ったら、私が退場することになりました。しばらく大学内で活躍する機会はないと思いますので、私はみなさんと一緒に関西大学を卒業します。学生時代の思い出としてそばに置いていただければ嬉しいです。

関西大学アクリル板一同



アクリル板一同からのメッセージ

サプライズプレゼントを受け取った何人かの卒業生に感想を伺うことができたので記載しておきたい。

化学生命工学部Aさん

アクリル板が再利用されると聞いて驚いた。アクリル板を見ると心苦しい気持ちになるが、フォトスタンドになることで、思い出を残せるプラスのイメージになった。

社会学部Bさん

アクリル板は人と人を隔てるもので、何をやるにしても「敵」のように感じていたが、それが思い出を飾れるグッズになり、アクリル板は「敵」という認識から「味方」に変わった。

政策創造学部Cさん

学生生活や就職活動を経た今となっては、あの時アクリル板があったから、様々な活動が再開できたのだと思う。教職員のみなさんがアクリル板だけでなく、様々な感染予防対策をしていただいたおかげで、1年生の秋学期には対面授業を受けられるようになった。ほんとうに感謝している。

人間健康学部Dさん

フォトスタンドは普段から使用している。今回、アクリル板が再利用されているということ、市販で購入するよりも親近感があり嬉しい。学生時代の思い出の品として喜んで使用したい。



フォトスタンドを手に喜ぶ卒業生

最後に

今般の卒業生へのサプライズプレゼントは、大学関係者他多くの方々の協力で実現することができた。この場をお借りして感謝申し上げます。

そして、コロナ禍という逆境を乗り越え、卒業の日まで懸命に前進してきた卒業生みなさんに敬意を表するとともに、みなさんの未来が明るく輝くことを心から祈念している。